

を残している。というのも、援助交際においてコミュニケーションの主導権を握りより多くの選択権をもつのは、男性側より女性側であるという点は前回の論文で強調したことであるが、援助交際をする女性は相手の男性をある程度の許容範囲で選別している。もちろん相手を選択できることは男性側にも当てはまるが、あまりにもヤバそうだったり、生理的に合わないと判断された場合は、断っているのである。もし純粋にバイト系という類型が存在しているならば、女性はお金さえ払ってくれるのならばどんな男性でも援助交際するはずである。しかし現実には、そのような援助交際女性は筆者の取材において一人として存在しなかった。つまりこの類型は、理念的にしか存在しないということができる。ただ本稿においては、この類型にもっとも近いと考えられるインタビュー事例を呈示した。

3-4 類型論の難しさ

AC系を特徴づける関係論的自己への影響に関して述べるならば、ある女性が援助交際を行うことは、自己の社会的な適応能力を高める場合がある。例えば、援助交際で出会った男性が日常の社会生活では知り合うことのできないような人物であり、その男性とのコミュニケーションを通してこれまでの自己のもっていた社会観が変わるケースがある。援助交際を通して知り合うさまざまな男性とは、筆者の取材で直接聞いた話であれば、医師、弁護士、大学教授、会社経営者といった社会的地位の高い人から、警察官、ヤクザ、高校教師、サラリーマンまでいる。実にさまざまな職業の男性が援助交際を行っており、援助交際を通して女性は、それぞれ異なるコミュニケーションに参加し、自己のもっていた社会観を変化させるのである。例えば、インタビュー時に19歳の短大生であったハルコは、ここでの類型ではバイト系に類別されるが、援助交際で知り合った医師との関係をふまえて、次のような発言をしている。

<データ9>

筆者：援助交際やっていたのは、いい人に巡り会えるとか、そういう意図はあった？

ハルコ：それはなかった。ただどなんかもっ

となんて言うのかな、もっと自分の世界(が)広がるかなと思った。うまくいけば、例えばお医者さんのことだったらさあ。

(1998.8.21 収録)

また26歳のOLと名乗るノリコは、援助交際のメリットについて次のように話してくれた。

<データ10>

筆者：援助交際やってよかった点って、ありますか？お金以外に。

ノリコ：うーん、何だろう。まあ、(社会的に)接点のない人と会えたってことぐらいかな。

(1998.9.2 収録)

「もっと自分の世界(が)広がるかな」、「接点のない人に会えた」という発言に見られるある種のコミュニケーション願望は、AC系に限らず取材したどんな女性にも、程度の差はあれ、見受けられる。援助交際を通しての自己とは社会的に異なる男性とのコミュニケーションによって、「こんな自分でも大丈夫なんだ」、「社会ってこんなもの」と感じることで自己の社会に対する適応能力(潜在能力)を高め、社会生活により適恰的に自己を変化させることが可能になる。社会学的に見れば、援助交際の目的がどんなものであっても、意図せざる結果として、その当人に学習されていく。

また本稿で呈示した三つの類型である欠落系、快楽系、バイト系において、快楽系と欠落系に類別された女性たちに関しても、自らの離婚経験や、家族に関して両親の離婚や家庭内での孤独を語る女性も多い。ここで難しいのは、快楽系やバイト系にもかなりの数の欠落系、特にAC系の女性が多いことである。先に登場してもらったマユミやユカリにもこのことが当てはまる。マユミは中学校時代イジメられまた家に居づらい状況にあり、取材時には家出状態であったし、ユカリもまた両親の離婚を機に、孤児院に預けられ、そこで小学校から中学校にかけての何年間を過ごしている。

これらの出来事をトラウマとしてとらえること